

1 本年度の学校評価をふりかえって

学校経営目標「共に育てる」という視点から4つの経営の重点を設定した。学校・保護者の役割分担を明確にして取り組み、それぞれの取り組み及び達成状況を自己評価し、共に改善策を考えた。

その結果、学校・保護者が課題を共有し、解決策を共に考え、評価・改善につなげることができ、PDCAサイクルに基づいた学校経営に資するものが多かったと考える。

2 評価結果の概要

分野	評価項目	取り組み状況と成果・課題	評価	改善策	学校関係者評価
教育課程・学習指導	新学習指導要領に向けた言語・活用力の育成	算数科を中心に言語・活用力を育成すると共に、教科専門性を生かしたTT指導の工夫・改善を図った。 児童の95%が、授業が楽しく、分かる、85%が新しく習ったことを実際に生活で使おうとしていると評価している。発表力、説明力、聞く力も前年比10ポイント近く伸びている。教師もほぼ同様の評価をしている。今後の課題は、学習の質と量の両立である。	B	学年で身に付ける言語スキルを明確にし系統的に育成する。 言語力・活用力を評価するための評価問題を作成する。 1C2Tを基本に、単元のねらいや子どもの実態に応じて、柔軟なTT指導を展開する。	築山の歴史あるTTは他校の模範である。ぜひ継続してほしい。 思考力・表現力・判断力を育成するには自前の評価が必要である。 教師が評価問題を作成することで、指導の重点を確認することができる。
	モジュールを取り入れた外国語活動カリキュラムの開発	朝の時間や音楽と組み合わせた外国語活動をほぼ全教師が評価しており、90%前後の児童が、外国語の活動が楽しく、積極的に参加していると評価している。	B	留学生等との体験交流や、食育と関連づけた学習など、築山独自の外国語カリキュラムを開発する。	ALTとの関わりを通して生きた英語に触れる機会を大切にしてほしい。独自のカリキュラム開発を期待する。
家庭・地域との連携	食育を通じた信頼の絆づくり	担任が養教・栄養士と連携し、教科・領域と関連づけた食育を実践した。90%以上の教師が、食育基本カリキュラムが整備でき、教科横断的な食育ができたと評価している。95%近くの児童が、食育授業が楽しく学習を生活に生かしていると回答している。 今後の課題は新学習指導要領下における食育授業時数の確保である。	A	食育基本カリキュラムに工夫を加えた上で継続実践すると共に、教科横断的な指導を通して食育授業時数を確保する。 給食を通じた日常的指導や家庭への啓蒙に一層力を入れる。	食習慣が社会的自立の基礎となる。これまでの食育研究の成果を継承・活用してほしい。 家族で食事を摂ることの大切さを伝えるなど、保護者に対する一層の働きかけを期待する。
	学校・家庭の連携による学習・生活習慣の育成	生活実態調査に基づいて作成した児童カルテを活用して、学習・生活習慣の育成に取り組んだ。 教師の100%、児童の91%、保護者の98%が学習習慣の向上を認めている。90%以上の児童があいさつ、決まりの遵守、手伝いをしていると回答しており、生活習慣の向上が認められた。課題は、家庭学習の充実である。	A	児童カルテを活用した家庭訪問・面談等を通して、家庭学習の充実を図る。 地域人材の活用、伝統的行事への参加を通して、社会性に裏付けられた豊かな学力の育成を目指す。	朝食摂取や睡眠時間の確保など、自分たちの生活リズムを見直す学習に一層力を入れてほしい。 小学校6年間を見通した地域学習のカリキュラム整備に取り組んでほしい。